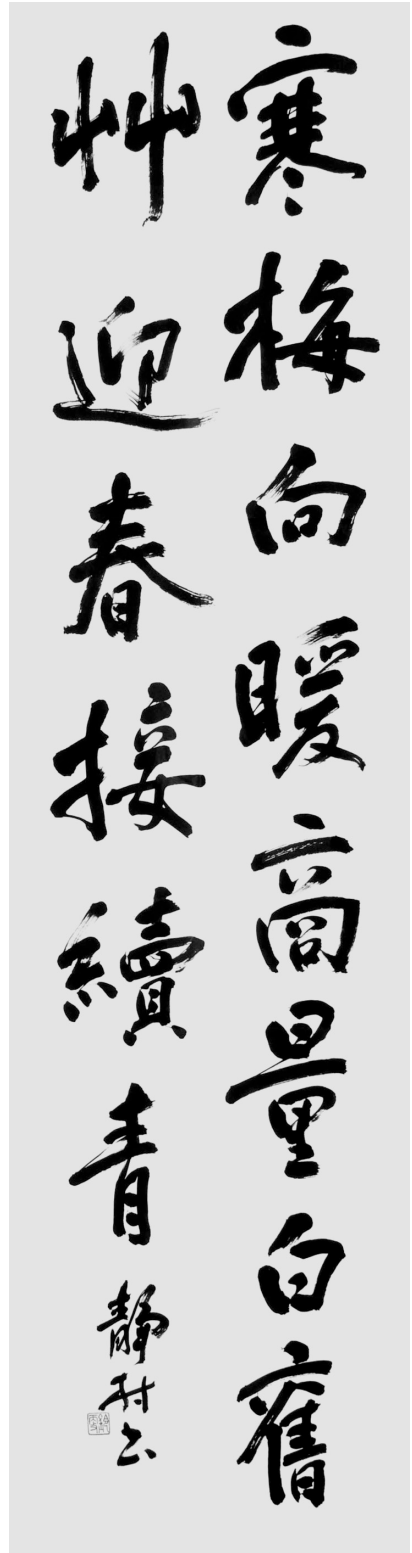


A
鈴木静村書

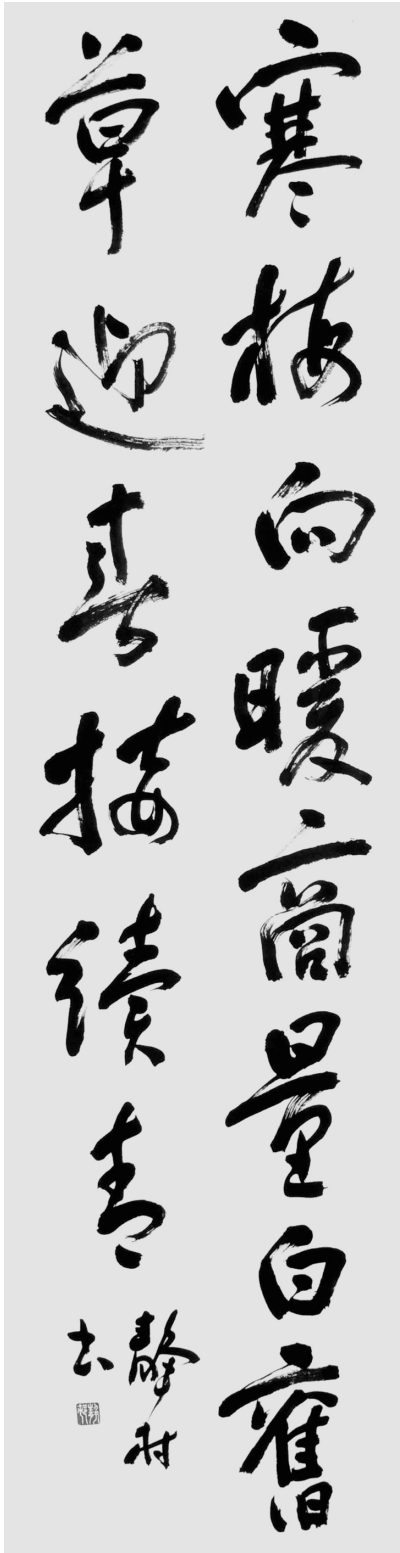
寒梅向暖商量白 舊草迎春接續青 (唐伯虎)
寒梅暖に向かつて商量して白く、旧草春を迎え接續して青し。



B

概観

級位ランク者の条幅への取り組みを大いに奨励。条幅部出品への境目は全然なし。勿論、半紙の基礎的課題と並行させつつの積極的なチャレンジを期待したい。今回のA作は行書条幅の作例。初歩段階向けとして「行書条幅」とした。要は、墨継ぎをたっぷりとし、潤渾をはっきりと打ち出してほしい。



主な文字について

寒 A四、五画タテタテの筆順作。Bヨコタテタテの作。向 一、二、三画接筆注意。暖 B旁筆順注意。商 B長横画清代に多い。量 A B墨継ぎ、たっぷり。白 画の接筆注目。舊 書体多い、字典参照。迎 A B共之繞ポイント。接 A B墨継ぎ。續 草体字典から正しく。特に草書体を使うときは、必ず「字典」を参考に、誤字にならぬように。

訳：寒中の梅は暖気に向かつて白く咲くのをはかり考えて、去年の草は今年の春に逢って、ひき続き青く萌えている。

予告 (三月二十二日締切)

霞開水閣桃千樹

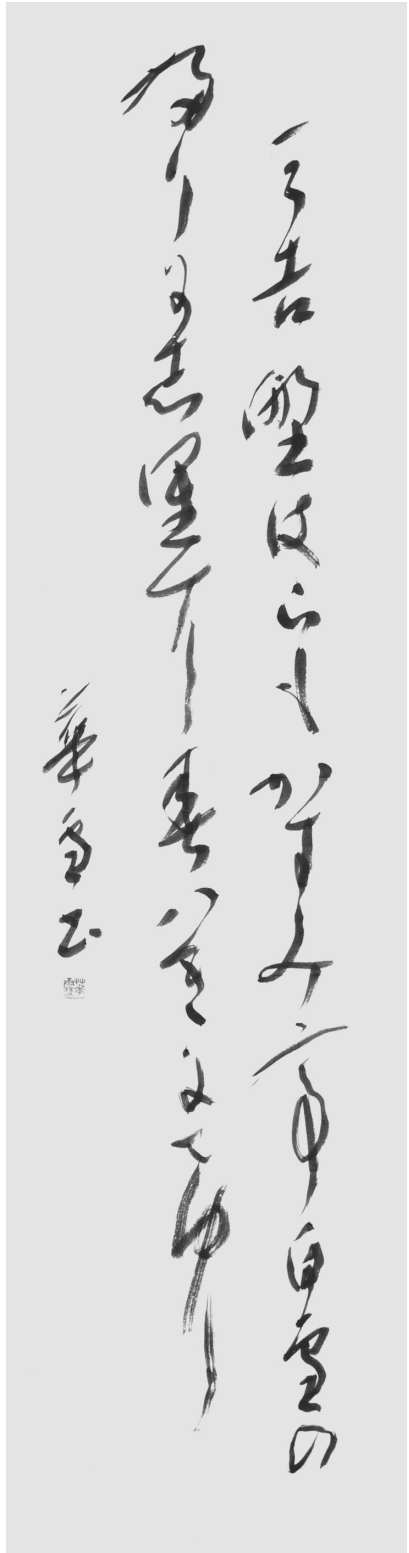
山吐蛾眉月半輪 (汪道昆)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

A

平岡華雪先生書

み吉野は山もかすみて白雪のふりにし里に春はきにけり (新古今和歌集 撰政太政大臣)
 み吉野は山もかすみ亭白雪の婦り尔志里耳春ハキル希り



B

立川遊汀先生書

三よし野は山もか須み亭白雪の降り尔志里に春盤来尔介里



使用用具
 筆 羊毛長鋒5号
 用紙 加工3号

学 び 方

新古今和歌集 卷一 一番の歌

「春立つ心をよみ侍りける」 短歌の題名どおり吉野の里に訪れた立春の明るい雰囲気を感じながら…。一行目、書き出し軽く「野、か」字で、やや字幅を出し、後は自然の流れにまかせ、二行目行頭「降り尔志」に字間を取り一幅の山場にしました。これは条幅構成の一般的方法です。後は左右の行の「疎・密」のかみ合せを考え、一行目後半「白雪」がゆったりしていますので二行目後半終句で詰めてバランスを取りました。全体、表面の変化を求めず静かな作品にいたしました。

予告

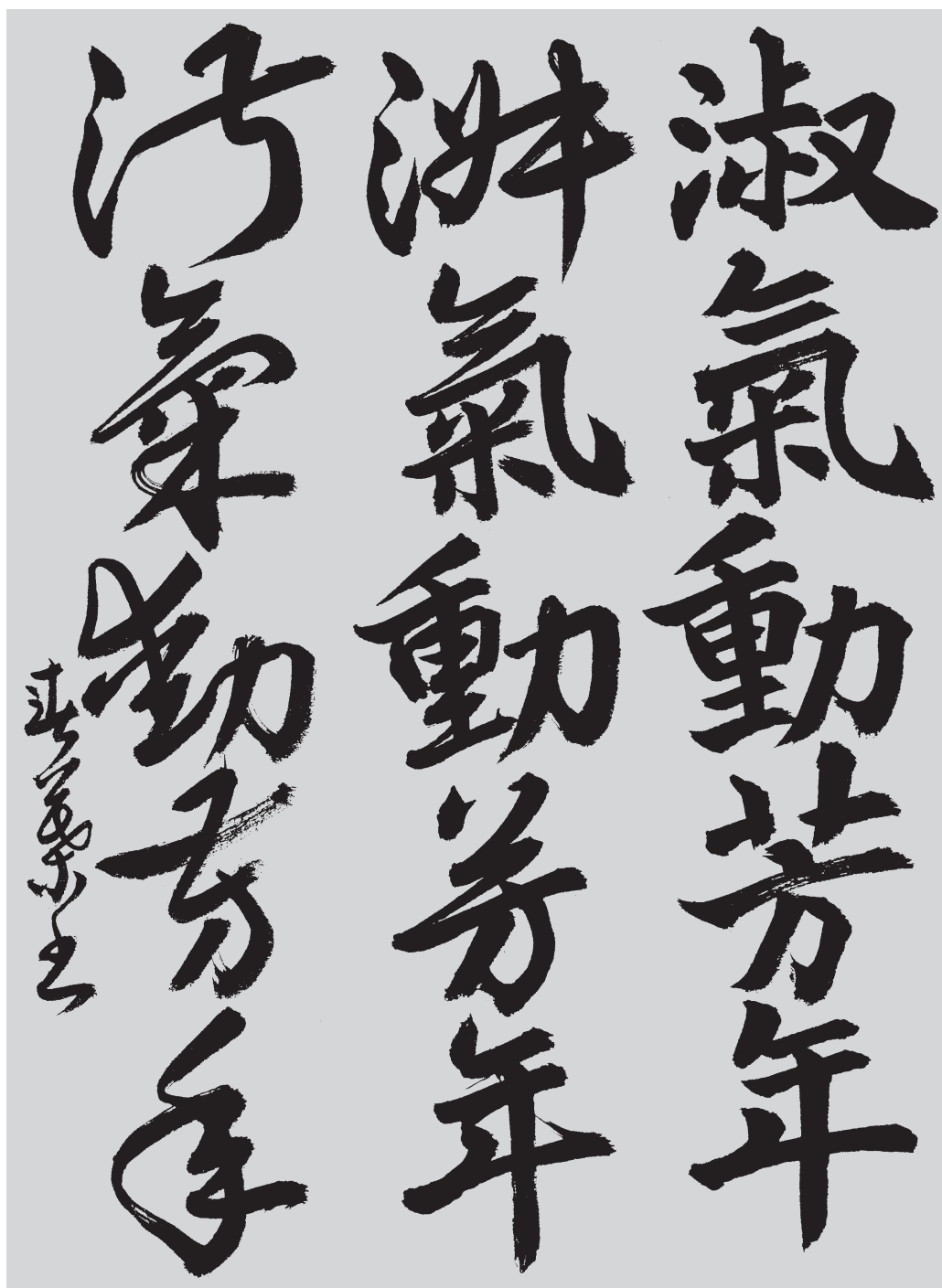
(三月二十二日締切)

群雀檐端をたちてみだれけり澄み徹る空に強き風迅し (吉野秀雄)

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

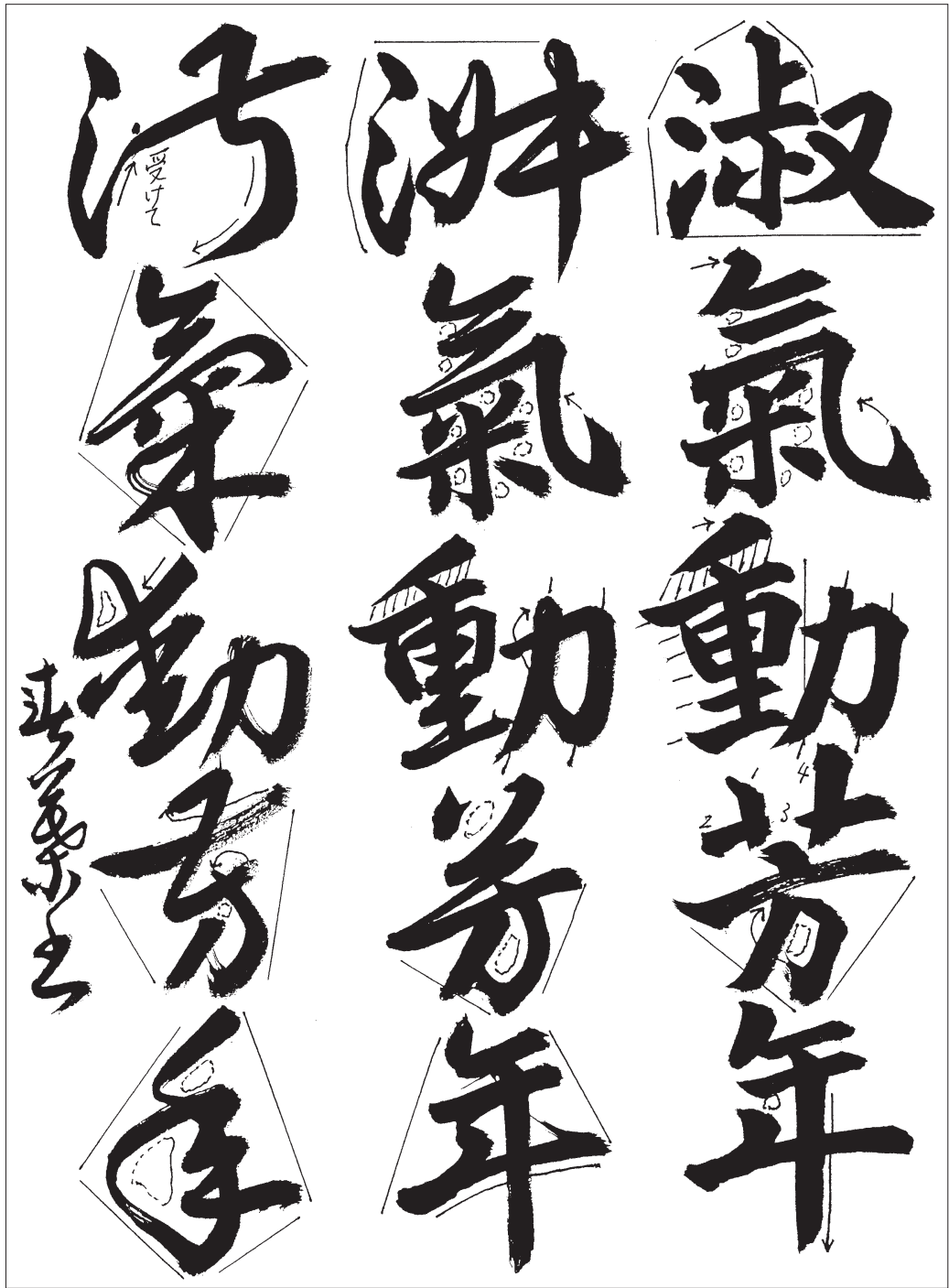
小林 春葉 先生 書

淑氣動芳年
淑氣^{しゆく}動^{うご}芳年^{ほうねん}を動かす。



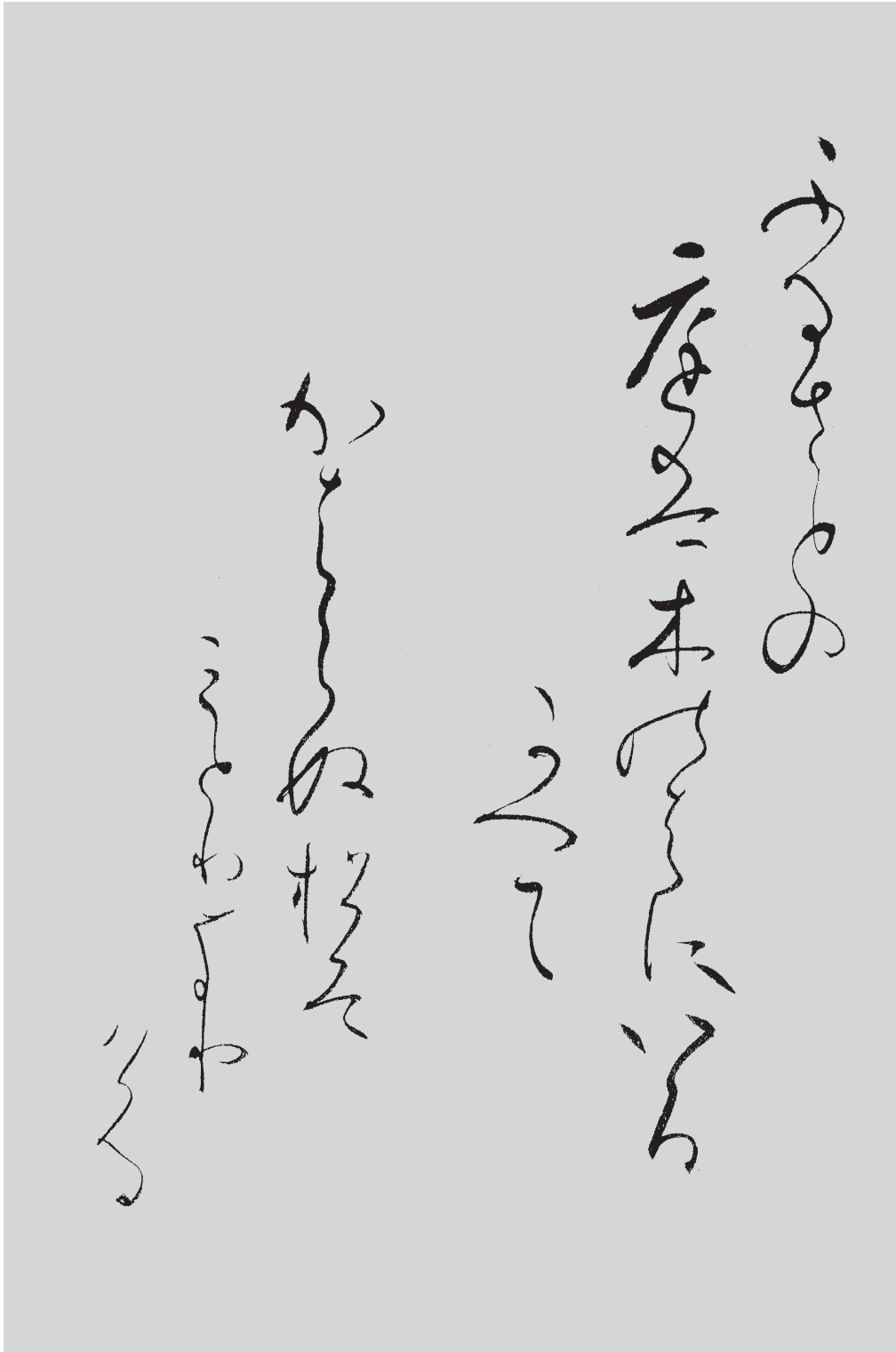
訳…春の気が洋々として芳年を動かした。そめた。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。



高塚竹堂先生書

ふるさとの庭は木の葉に色かへてかはらぬ松ぞ緑なりける (千載和歌集 惟宗廣言)

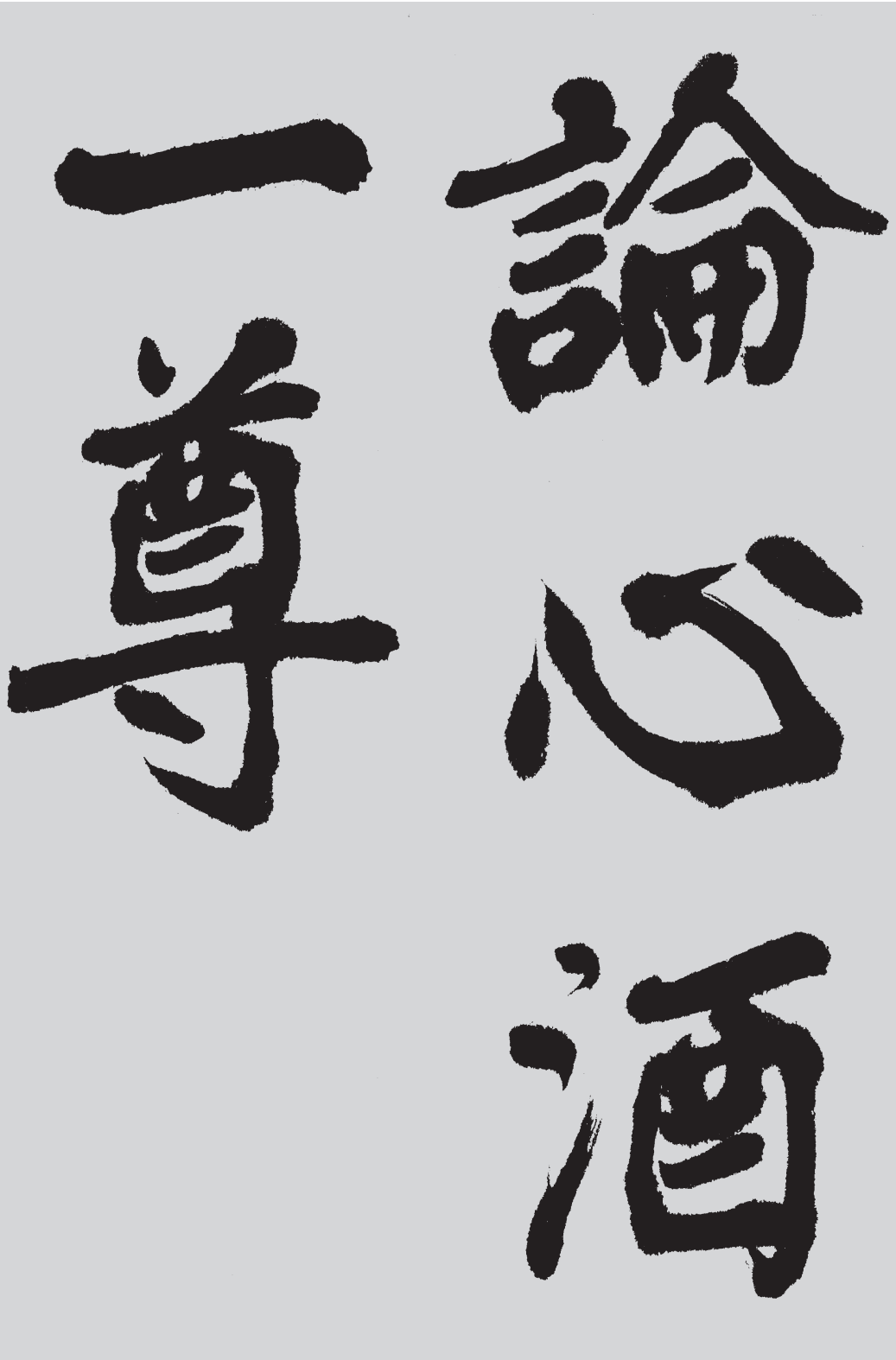


◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

まづは事前習熟を—
 上の句、下の句の二群
 構成。両群共三行。
 左群の結句は細線
 小字で締めこいる。特に行頭・行末
 の段差に変化に留意云。と同時に、墨を継ぎつらぬこと、
 個々の細線を見極めることが大切。連綿は最初の五ふまに連綿、
 以下四字、三ふまそへて三ふまと事前での習熟が必須。尚、法軟で力量を發揮す。

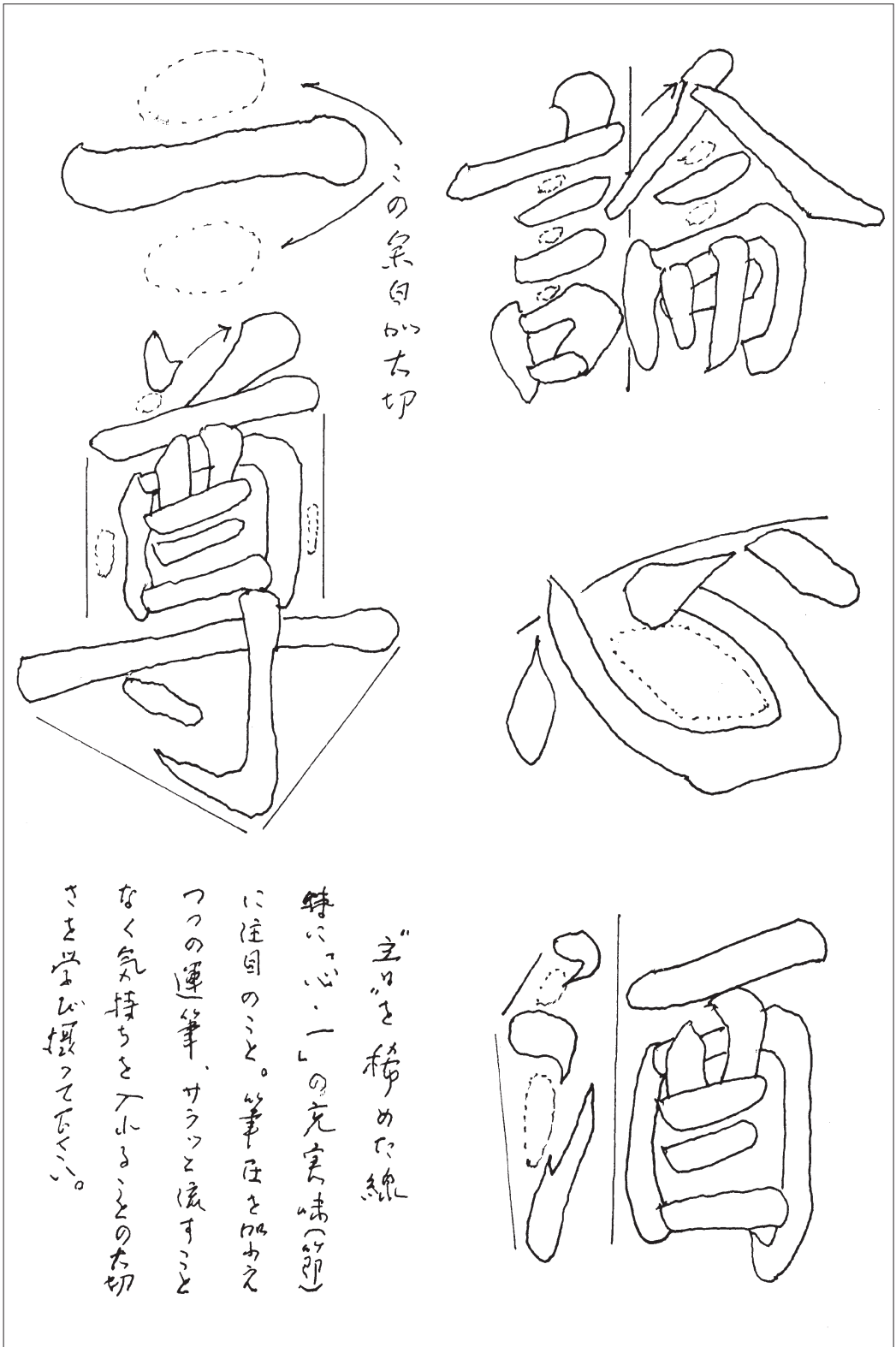
平岡華雪先生書

心を論ず酒一尊(馮文玉)



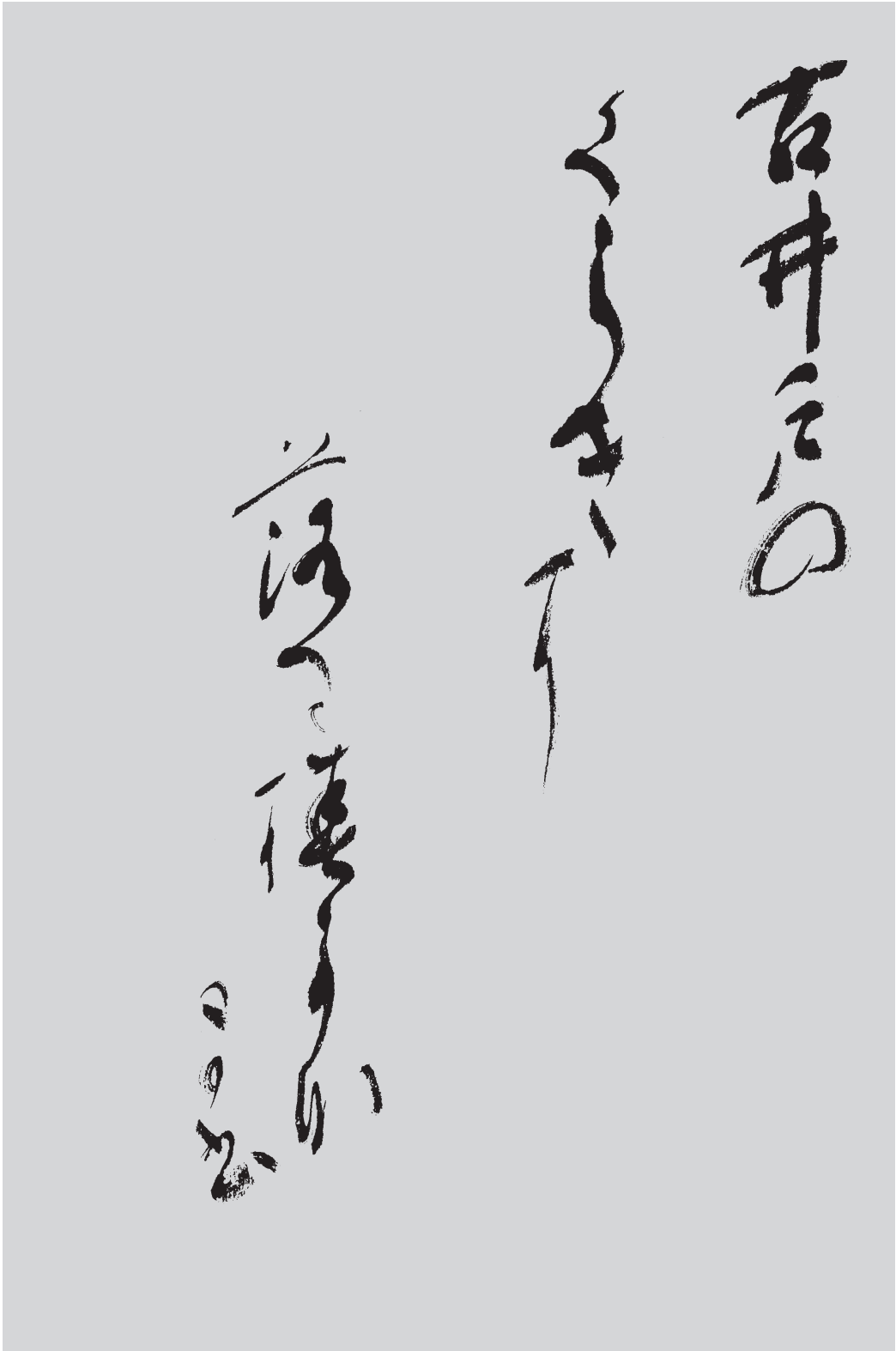
訳…心の底を打ち開き論ずるにはこの一樽の酒がある。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。



平岡華雪先生書

古井戸のくらきに落る椿かな(蕪村)



◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

百井戸の

放ち書きキ

長め



の筆のまのよ

感あり

三行書きの一般形。

最初の、「古井戸」に硬くなると失敗。法々といふ気持ち。

「井」の画目は長くとって余白をとりたい。「久らき」は主調ひくる、順次筆圧を弱めた。

「こ」画目は左へ張り出さぬりさ。「身」は「き」の末画に寄せ、すきりと執る。

「た」は「湯」の部分、筆と鈍めて、楷墨継ぎ。「可」那と連続「抑」キレよく。



小暮 崧 華 先 生 書

水光翠繞九重殿 花氣濃薰萬壽杯 (鄭毅夫)
水光翠は繞る九重の殿、花氣濃に薰ず万寿の杯。



訳：春水みどりに奥深き宮中の御殿をめぐって流れ、咲く花の香りは濃やかに匂って万寿を祝する杯に入る。

良知 文 苑 先 生 書

この頃の日和つづきに萌えいでしみづべ冬草ふみてあそべり (土屋文明)
この頃の日和つ、支にもえいでし水邊冬久沙ふ三て遊へり



◆注 意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

外川霞夕先生担当

九成宮醴泉銘 唐 欧陽詢



(壹海)内、終以文徳懷遠人、東越青丘、南踰
海内を壹にし、終に文徳を以て遠人を懐く東は青丘を越え、南…

概観

臨書について

△目的▽ 優れた古筆、法帖など古典の筆跡などを学び、表現技法、創作、鑑賞力など習得することを目的とした学習方法。

臨書の主な方法として一般的に形臨、意臨、背臨がある。

・形臨 字の形をまねて書く。自我意識を無くして一点一画のあり方を把握する。

・意臨 古典から受けた心を理解、表現と自分の個性を合せて臨書する。

・背臨

形臨、意臨によって臨書した、古法帖の用筆、運筆、結体など手本を見ないで書く。臨書の仕方の上しを確認する手段である。

◎倣書 臨書を創作に応用して自分で選んだ漢詩など古典の雰囲気まで表現する。

九成宮醴泉銘は整齐で鋭い直線の書風です。形にばかり囚れると堅苦しく懐が狭く単調で情緒が失われてしまいます。運筆にリズムを加えた筆勢で情味のある臨書にしたいと思えます。

各字のポイント

内 左払いとがっているが、丸みがある。まず点を打ち下に向け筆をすすめる。

終 「糸」の点画は二画目ははね、三画目は返すような筆意。

以 左右の画は短い。点画は上部にとり空間をあける。

徳懷 縦長の造形。傍の二画目、縦画は上につき出し強調している。

遠 点画の大きさはその上に乗せる旁とのバランスで考える。

はね出しは太く重量感で上部をささえている。

青 横画は右上がり等で間隔、縦画は中央より右、「月」で均整を計っている。


◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

内藤香瑤先生書

花明千嶂曉 雲暖一山春（王銍）
花は明なり千嶂の曉、雲暖なり一山の春。

花明千嶂曉
雲暖一山春

香瑤

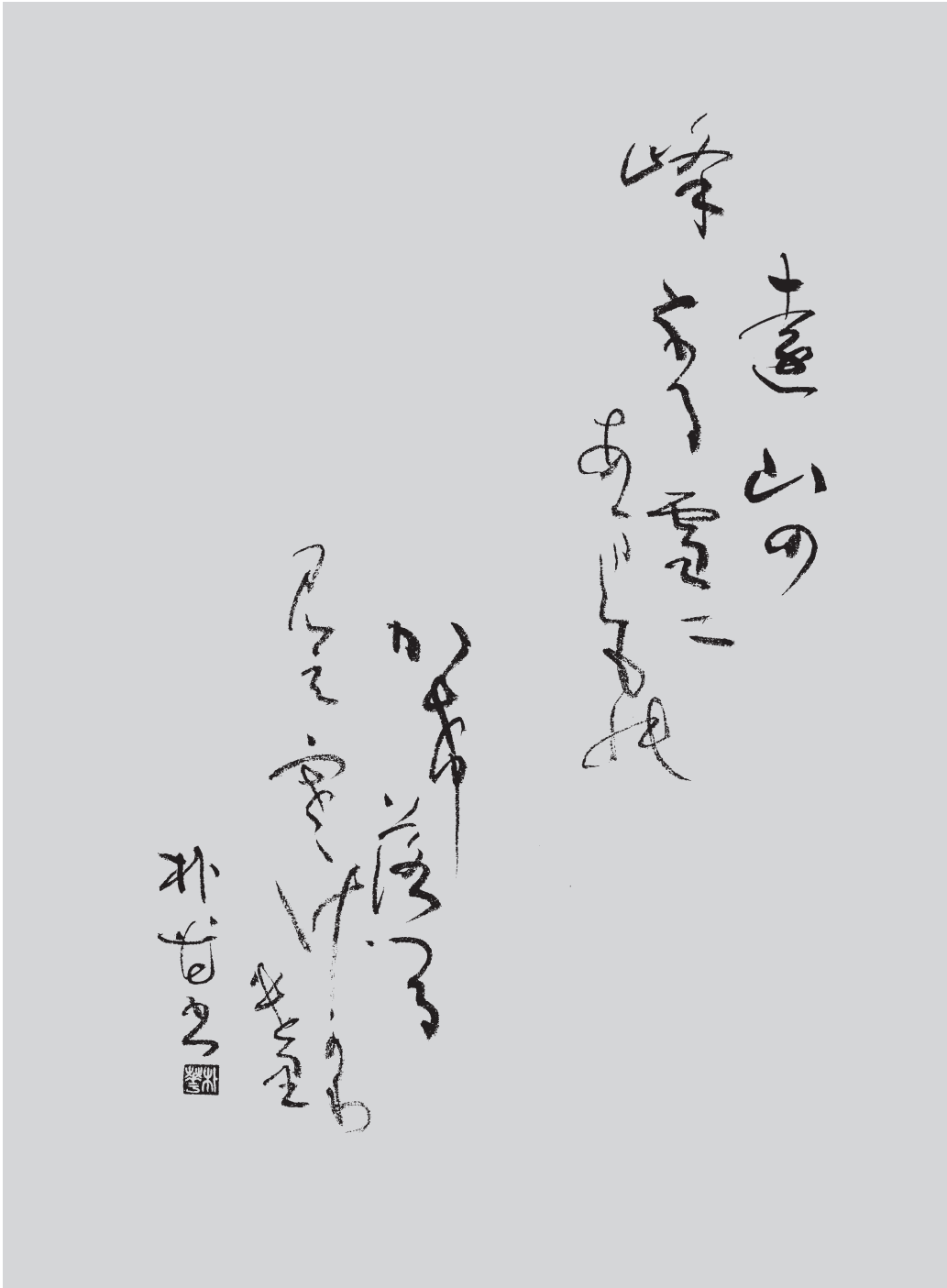


訳：花は咲いて山々の曉に明かにみえ、雲は暖かに一山の春をつつむ。

◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

向山朴花先生書

遠山の峰なる雪に天雲の影落つる見え寒けかりけり（若山牧水）
遠山の峰奈る雪二あ万久も能か希落つる見え寒け可利遣里

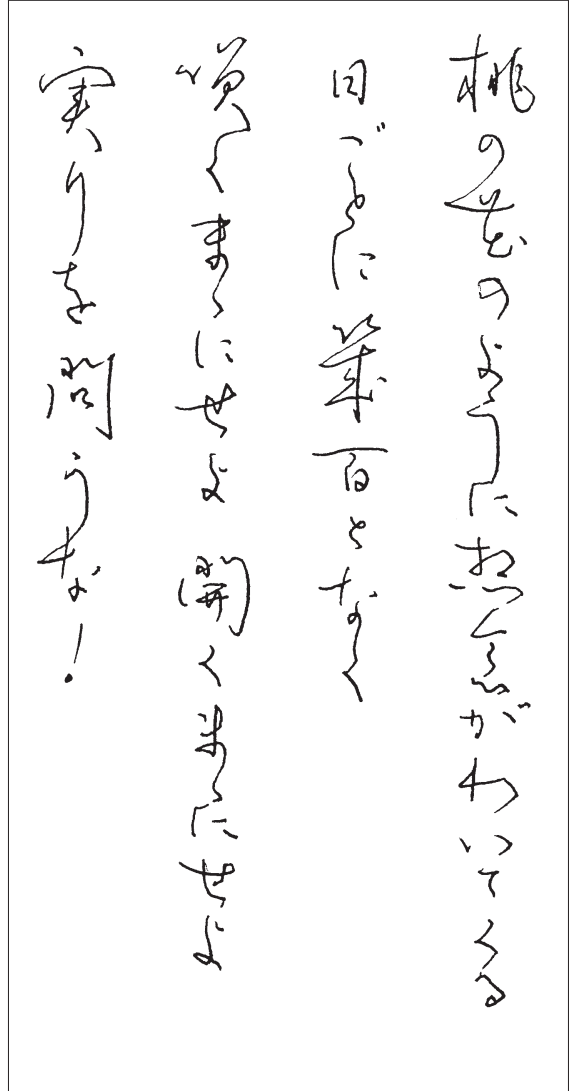
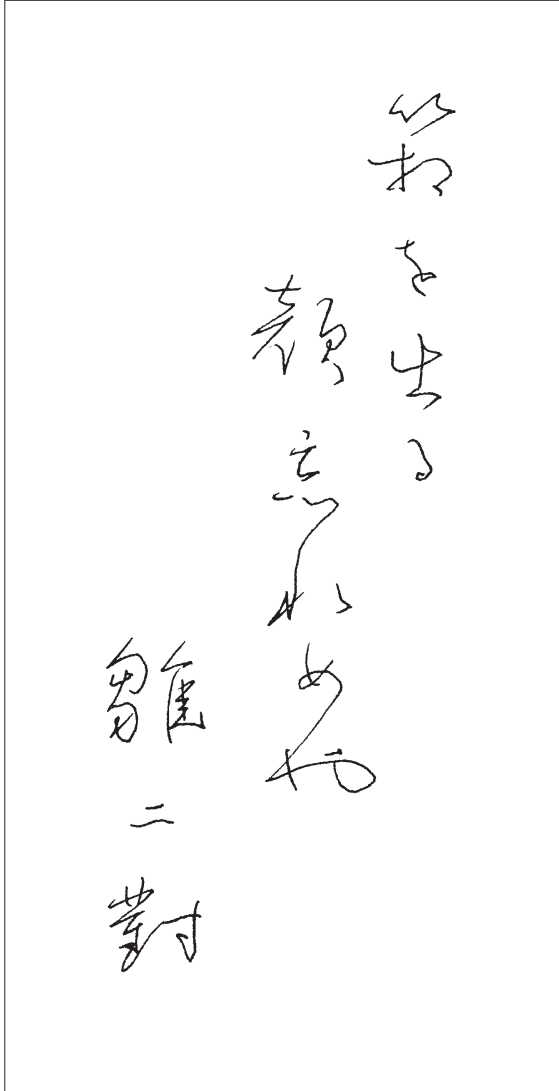


◆注意 裏表紙の昇試規定を参照のこと。

喜多波竹先生書

課題 2 (初段階以下)

課題 1 (初段階以上)



課題 1 (初段階以上)

桃の花のように想念がわいてくる
日ごとに幾百となく
咲くままにせよ 開くままにせよ
実りを問うな!

ヘルマン・ヘッセ

◆注意

- (1) 自分の段級に合った課題を選択。ペンまたはボールペン(黒色)を使用のこと。青インクは不可。
- (2) 段級欄は本人が記入(色は黒)はじめて出品される方は私製の紙(3×4 cm位に) 次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
- (3) 会員は無料・会員外は四〇〇円
- (4) 添削希望者は直接担当の先生にお申込下さい。(返信用封筒に自分の住所・氏名を記入し、切手を貼って同封のこと)。
- (5) 課題 1 六〇〇円
- (6) 課題 2 三〇〇円

課題 1 喜多波竹先生

課題 2 〒二四〇一〇〇六一

横浜市保土ヶ谷区岡沢町

二一九ノ三

課題 2 (初段階以下)

箱を出る顔忘れめや雛二対

蕪村